

芭蕉句選
下



焔之部

泊水集は白
杉凡

うゝのしほ

初秋やきくはうは秋の夜も
七夕や秋はくはあまの夜
たあつたのしほ 宿合羽
文月やらるる夜は
何れも夜は様か玉の川
合歡の木は葉も
さるかよはるる葉も
さるかよはるる葉も
さるかよはるる葉も

Handwritten cursive text, likely a title or introductory note.

Main body of handwritten cursive text on the right page, consisting of several lines of dense script.

Main body of handwritten cursive text on the left page, consisting of several lines of dense script.

あつちの酒を飲むに似て

二日の浦

あつちの酒を飲むに似て

開越る口を

隠れ

あつちの酒を飲むに似て

あつちの酒を飲むに似て

あつちの酒を飲むに似て

開

あつちの酒を飲むに似て

あつちの酒を飲むに似て

あつちの酒を飲むに似て

あつちの酒を飲むに似て

あつちの酒を飲むに似て

あつちの酒を飲むに似て

あつちの酒を飲むに似て

あつちの酒を飲むに似て

あつちの酒を飲むに似て

あつちの酒を飲むに似て

あつちの酒を飲むに似て

あつちの酒を飲むに似て

あつちの酒を飲むに似て

かきつばたのふし

ぬれさるる人なかりしとてあつた秋
小秋ちりぬるとかおふ思ふさうし

あふさふさお母七十のあつたさうし

秋七月七日のあつたさうし

七種秋もて題とてあつたさうし

さうし七人は結縁しつたさうし

吾又七使のあつたさうし

七株の秋はあつたさうし

波のあつたさうし

一家のあつたさうし

小松のあつたさうし

あつたさうし

あつたさうし

あつたさうし

あつたさうし

あつたさうし

守榮院

あつたさうし

あつたさうし

あつたさうし

あつたさうし

あつたさうし

あつたふくふくはなはな

きりぎりす

蘭花香も様のほかにいそぎ
草のりくあはくはたのち福
鶏のやうにわがまのあま
あまのあまのあまのあま

画讚

枝のあまのあまのあまのあま
越後のあまのあまのあま

美園のあまのあまのあま

後醍醐帝は御陵をお

御殿に御座りてあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま

寺名菴

あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあま

後日記美人園
題

ふ別ふりしはさかたにわたり
床へ暮る軒へ入るる
ふ髪ぬく札の下をまわす

大田の神社へ宿家盛る甲錦

お切あしと樋口おころの使あし

苗のついでに縁起かゝる

おさんお甲の下をまわす
美作のさかたはまたまの
海士お家も小海をまわす
情鈴七九の

小橋もあつて秋は紅葉あり
春の名はあつたはつた
外はゆき霜こころの
相の木へ鶯啼きある梅の
花は目の今もあつた
稲刈る葉の木へはは
ふり舞花あつた
機やまもあつた
お稲のまもあつた
粟得

東順 東順

伯新集 伯新集

命

入月の阿比の田隅の

月代や藤もみ代たのの霜

月のこゝろぬよお摺もあゝ

戸城あゝけとあゝり

伊吹山ゝらゝたゝゝゝ

よゝゝは只是孤山の懐あり

甘さふ月をあはまゝ伊吹山

見ると影もまゝの月夜と音と

九さゝの起て月あはれ

宿の月夜細きおの

行方 伯新集 伯新集

阿比中もあはれとあはれと
橋板おまのわら月あはれ

昔もあはれ

月夜や阿比のあはれ

廿日あはれ月あはれ

ねとていゝくたゝゝ

あはれとあはれと

子紅のあはれと

あはれとあはれと

馬のあはれとあはれと

命

茶の味

作 茶の味は茶の葉の味

茶の味は茶の葉の味

茶の味は茶の葉の味

茶の味は茶の葉の味

茶の味は茶の葉の味

茶の味は茶の葉の味

茶の味は茶の葉の味

茶の味は茶の葉の味

茶の味

稲の葉の味は茶の味

茶の味

茶の味は茶の葉の味

茶の味

茶の味は茶の葉の味

茶の味

茶の味は茶の葉の味

茶の味は茶の葉の味

茶の味は茶の葉の味

茶の味は茶の葉の味

葉の及大根のおまゝあり
 葉の香や厚や切せる程は
 菊山ありちやう程は「為目」
 菊は香や厚や切せる程は
 香文の香や厚や切せる程は
 香文の香や厚や切せる程は

上中温泉の湯

中の中や香や厚や切せる程は
 獲ありちやう程は「為目」
 香文の香や厚や切せる程は

猿酒りよよよ
 日敷ぬれぬれ
 とあると考へ

機や命哉のいふまゝあり
 機や命哉のいふまゝあり
 機や命哉のいふまゝあり

如水別荘

山とる葉の及大根のおまゝあり
 山とる葉の及大根のおまゝあり
 山とる葉の及大根のおまゝあり

不破

秋風も数々さすも不破の山

樟松金嵐葉

株がふおきとけうの葉は秋

か賀山中樞天と名つきて

菴の本はけり葉あらしも秋の風

牛とるよ坂のきりりて株は世

う田土川の道越初とらけり

けりけりあらしはあまはれ

雲物たふさくはあまはれ

猿もよて人推ふる秋の風くさ

こま昌寺とらあまの宿る

終末秋のあまの宿る

何れとて日をくさし秋の風

名もはるよまはれ株は風

あふしとて又根葉し秋の風

か別一葉墓より宿

塚のあまはれはけり株は風

正東あまはれはけり秋の風

伊勢はあまはれはけり秋の風

尚書下

秋

ゆるり秋風ゆるり秋の風

ゆるり秋風ゆるり秋の風

義經はさくらふゆるり秋の風

貞享甲子年八月以上の破面

とあるがふゆはあつたふゆあり

ゆるり秋風ゆるり秋の風

ゆるり秋風ゆるり秋の風

ゆるり秋風ゆるり秋の風

ゆるり秋風ゆるり秋の風

ゆるり秋風ゆるり秋の風

車庸亭

ゆるり秋のゆるり秋の風

秋の夜城ゆるり秋の風

ゆるり秋風ゆるり秋の風

ゆるり秋風ゆるり秋の風

ゆるり秋風ゆるり秋の風

ゆるり秋風ゆるり秋の風

ゆるり秋風ゆるり秋の風

人の短もゆるり秋の風

長をゆるり秋の風

向

下

物心く唇重く 秋中不風
きんも行人あつと秋の暮
人きくもけりるのちのち
海知是夢

よきあやの重くはるか昔戸を秋
くちのちあつと秋の暮
さかしのちあつと秋の暮
見はるか秋の暮
秋十とせしむるは秋の暮

イニ海知是夢
海知是夢
秋の暮

イニ海知是夢
秋の暮

は秋を好ふと秋の暮
又坂是柏典行
秋中不風
女木津相実無行

秋の暮もはるか秋の暮
長月れは秋の暮
あつと秋の暮
よきあやの重くはるか昔戸を秋
と秋の暮

よきあやの重くはるか昔戸を秋

梧きりぎりすの秋あき結むすばうりもさるのりよお

白しろの州しゅう産うぶのりよお

秋あき涼すずしむらもあまや瓜うり煎い子こ

冬ふゆ瓜うり也なりもあまのりよお

懷なつか老おい社やしろ

樂たの風かぜ我われ遠とほく昔むかし秋あき菊きくもあまのりよお

大おほ坂さか清きよのりよお

松まつ風かぜ秋あき我われ也なりくりて秋あきうれぬ

秋あき好こののりよお

以も秋あき也なりもあまのりよお

行ゆ妹いもうと也なりもあまのりよお

菊きく也なりもあまのりよお

西にし谷やのりよお

芋いも也なりもあまのりよお

芋いも也なりもあまのりよお

粟あわ津つのりよお

大おほ和わの國くにのりよお

竹たけの園のちのりよお

例れいのりよお

足押はむ教ふつ二集よあり

綿弓や登登ふたつを竹の集

外宮より信守りふまの松風

多又しむとらふた心找起

晦日月あふむ世は移を極く風

ふむとふふ皆たあひの西師近交

追加

たふとむおお指は秋は雨もつ

秋海棠西瓜ふりまふり

健てほめ月健葉あつちやま

かゝまふりくも浪乃下おせ

松茸やかめあつちを松形

此寺と庭一たつ心のまき

乃細一夫撲取州は花は

白紙

後衣のころの小袖のまゝぬるの神
給のうらえりまゝれり秋を
かくさぬを あら 掌付小まゝぬし

冬之部

冬の時節は小養下知に
旅人と我名下知に
山株へ井ふの
一層招き
時

酒集一尾杯ハ
と何り

之は江小趣として島田の

イニ言わうしとあり

強塚幸うあまありき

イニ言わうしとあり

霜しそ名残のしるの晴る哉
州松木しるるあ乃あう
全屏の相結あるひ冬と電

千川亭

相しそ伊喚もんとてや冬と電

贈海堂

難波はや田あのかつて冬と電
冬あしそ又ふらまをうんはさし
あうの傳もあるる人よ中あ便

先従へ梅我ち後乃冬と電

三列菅沼亭

あまし倦るは来うしそ冬と電
木格ふ白ひや付しそ冬と電
あしそ小岩のしるる松のあ
木かもしや頼もあつて人のあ
こつしあつてあつてあつてあ
冬格は後よとあつてあつてあ
あつてあつてあつてあつてあ
あつてあつてあつてあつてあ

イニ言わうしとあり

イニ言わうしとあり

冬はみぢあつたよふちをちかきあは
まのふさふさ入れて解くよふちのぬ

ちかふはなをたけ

花はまほしくあつたよふちのぬ

ひつちりちりちりちり

靴つあつたよふちのぬ

旅は痛くあつたよふちのぬ

るあつたよふちのぬ

若梅やまつたよふちのぬ

氷苦く僵つたよふちのぬ

范蠡と趙南のふさふさ

安らぬよふちのぬ

題はあつたよ

一はあつたよふちのぬ

樽のあつたよふちのぬ

付社あつたよ

あつたよふちのぬ

あつたよふちのぬ

あつたよふちのぬ

あつたよふちのぬ

あつたよふちのぬ

あつたよふちのぬ

後のふさふさのぬ

ふさふさのぬ

南

まじりてはるかに望みはせ給ふ
初雪や幸養へてはるかに
京まじりてはるかに望みはせ給ふ
菊根越え人あはれはるかに望み
二人とて一重をたはるかに望み
扱ふまじりてはるかに望みはせ給ふ

室山自画讃

庭掃くはるかに望みはせ給ふ
酒のあはれはるかに望みはせ給ふ
心あはれはるかに望みはせ給ふ

いふは行んといふ

いふ市人よはつたまきまき
やのまきとまりのまきへ

市人よはつたまきまき

對友人

君火のけ独物とせん者なけ
日はあはれはるかに望みはせ給ふ
まじりてはるかに望みはせ給ふ
あはれはるかに望みはせ給ふ
まじりてはるかに望みはせ給ふ
あはれはるかに望みはせ給ふ
まじりてはるかに望みはせ給ふ
あはれはるかに望みはせ給ふ

あはれはるかに望みはせ給ふ

は白尾洲を中河
人あはれはるかに望みはせ給ふ

あはれはるかに望みはせ給ふ

此の上を引く世に於ては
雁書に引く世に於ては

二月堂より書く

あまや水の傍に水苔の如く
海へ水は移はる水のふか
雪の如く七果を海へして
星の如く園地をよもや
驚くはるるを
葱ふくあふるるを
鳳来より書く

新出の
産物

夜更に山への出に家室を

旅宿

ことを焼くを拭あはるるを

越人と吉田の強

室にれと二人旅の如きもの

塩鯛の薫らねる室に魚は店

炉に火をきやた友を新装は

支梁亭

口切に櫻は庭をあらう

徳と好の染は惜しく

はるのくちをせむるぬの丸の中

又通黄のまを國七寺名をま

ふりあはし支まに海らんあ

を契りしよはひんかむをま

次初冬一板のまを海ゆら

あふりりりりりりりりりり

受る

まを地えんを枯木の枝の長

水銀油のまを酒又味

まのま海船まよ積ませり

まのまま雁ありまのまを海

水鼻一海まをせりり海取

まの月海川の回まをし

まのま神と旅まを日教り

まのまままままままま

熱田

あまのまを航船のまを七

まのまをまのまのまを

まのまをまのまをまのま

まのまをまのまのま

まのまをまのま

やわのははるしこいさる火揃うぬ
ほつゆ族のさるや遠火燈
るふしちきもあつと冬のゆ
雁さしちきぬの田圃のまきぬ
月夜のちき針きさんき入
のち替も空也の瘦も空の中
長唄は梅もめりぬ。鉢さる
納豆も家もあつちちち替も
芹も子ゆもか替わあらぬおま
るんまの事も風替も即ちか

煤もあせられに宿のさる 鼻
すまねるを枝の一本のゆりあ
煤りさささ、棚はる大工の
旅病して思ふやうに世の煤りひ

對内人の僧

ちよもやせお煤しちち海も古松も
月必ち師走も子落も梅さる
うらぬりの師走も海もか
ゆゆの師走の市も行くも
年の線も質もあつちち

行辨記よ上巻の
目代也と云

台邊下

三十一日迄一編の音

三五

乙州の終宅まで

人の家城がせむし城をよ
廿二日迄の事
はよむし城の事
女つら西の信置と云

異をよふものも
松凡所持の短尺
すれ中とあり

せむし城の事
まよむし城の事

小町画賛

多しむし城の事

焚田所造営

まよむし城の事
さしむし城の事
焚田所造営の事
まよむし城の事
まよむし城の事

まよむし城の事
まよむし城の事
まよむし城の事
まよむし城の事

句集下

三五

分母の底からなる
魚の心もさくさく
塔の石の甲斐あり
月光の影もさくさく
山家一とて
誰より

誰より...

追加

あきらめ此世を
去る道は

杜國、不幸を

鷹の

...

...

...

...

...

白邊下

五三

打ちあぐさく花入さうれ梅つさき
 およきくくと帆柱さき入らふ
 之をひとらふ
 梅柱さきつらひ保美の里

雜之部

酒飲する人の後

月夜もほろけ酒のちかほら

常律の後

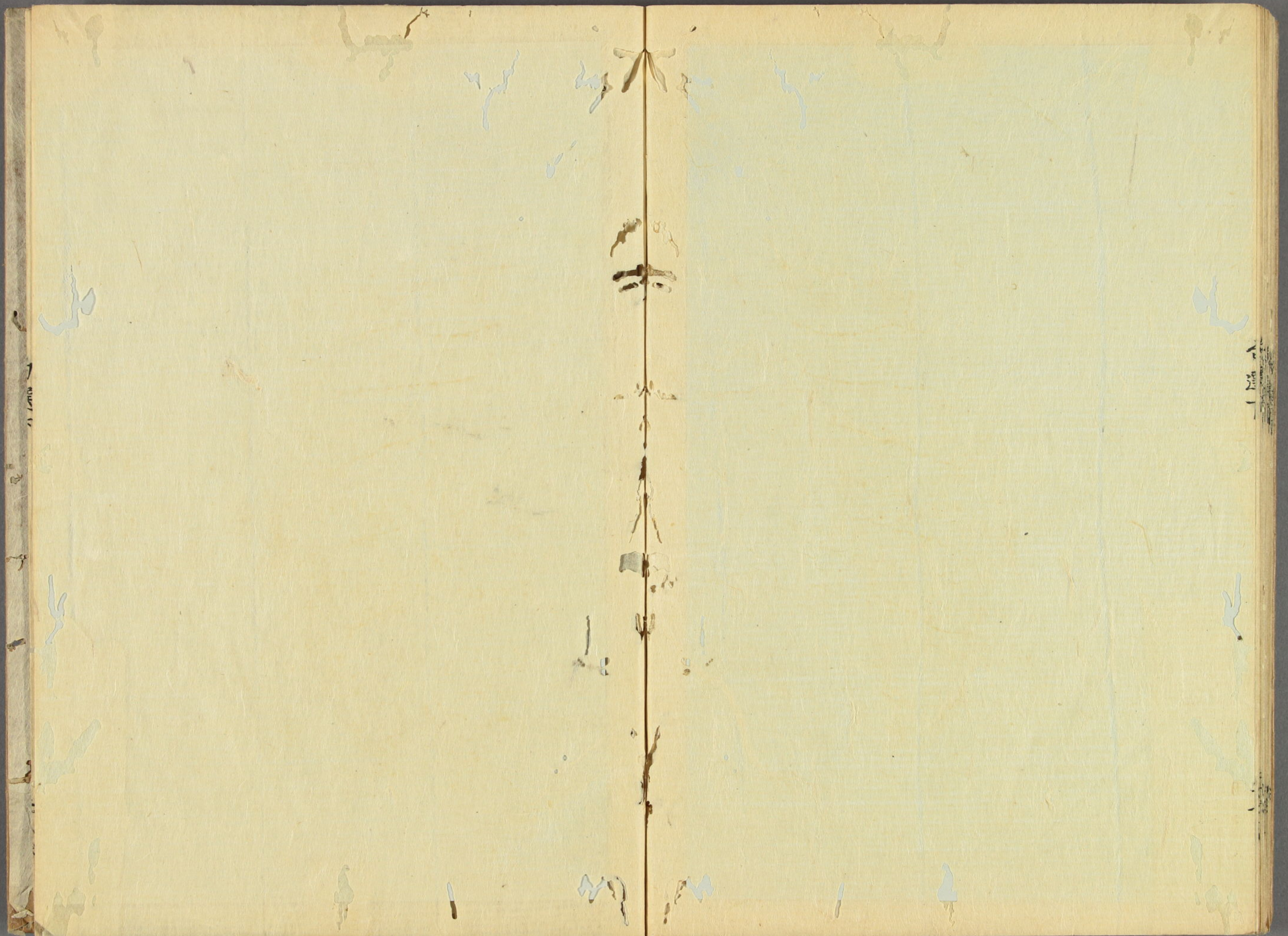
物ありや城のしほり

三聖人の圖

くちの是や海もみのり

うちめしむ杖の板をたてるか

あまの心を推す月海は心



七
一

元文四己未年

二月下旬

芭蕉翁并門人
俳諧書林

京寺町二条上所
井筒屋在兵衛

同 宇兵衛

